



## 立春空港にぽっかり梅の園

立春の四日、ジェット機が行き交う成田空港の駐機場の真ん中で、梅の花がほころび始めた。

開業したばかりのモダンな第二旅客ビルのすぐ前。広々としたコンクリートの路面の中に、飛び地のように残された四角い土地がある。約五百五十平方メートルの木が二十七本植えられている。人工空間に置かれた箱庭のようだ。

地元住民は「梅の木共有地」と呼んできた。権利の三十三分の三十二は新東京国際空港公団が買収したが、三十三分の一を反対派が持ち続けている。新東京国際空港公団は、この土地だけを「保存」したまま、周囲を駐機場として使い始めた。

去年、多くの木が枯れ、公団は二十本を植え直した。今年、そのほとんどが花をつけ、いま二分咲きだ。

この朝の空港での最低気温は零下三・〇度。前日は同五・二度まで下がった。反対派農家と国の厳しい対立の歴史が、奇妙な光景を生んだ。

駐機場内の未買収の共有地に咲く梅の花＝4日午前10時30分すぎ、成田空港で